

東アジア文化研究科 (2022 年度)

『東亞典籍文化交流論考』 金文京

博士論文要旨

本論文集は、筆者がこの二十余年の間に書いた論考のうち、東アジアの典籍、文献にまつわる交流を主題としたものを選んで収録したものである。その多くが中国の学会、刊行物で発表したものであるため、中国語の論文集となった。

東アジア漢字文化圏（中国、朝鮮、日本、ベトナム）の文化交流は二千年におよぶ長い歴史をもつが、その特徴としては、まず前近代においては、中心となる中国から近隣諸国への一方的な文化伝播で、その逆はほとんど見られないこと、ついで交流が主に漢文書籍の伝播によって行われ、人的交流はヨーロッパ等他地域にくらべ相対的に少なかったことが挙げられる。近年、これら書籍交流（中国からの伝播といわゆる佚存書の逆流）についての研究は関係諸国においてきわめて盛んとなり、多くの成果が公表されている。ただし現在の研究では、おおむねこれらの交流を肯定的にとらえて、その文化学術交流としての積極的側面にのみ強調する傾向があるが、実際にはその背景に、文化観の相違による誤解、誤読や国家観の衝突など矛盾も多く見られる。本論考では、具体的な典籍交流の実態を客観的に紹介するとともに、友好的文化交流の側面と衝突、矛盾などの側面双方を合わせて考察するよう努めた。

ただしほとんどの論文は意図して書いたものではなく、たまたまその文献にめぐり会った時に書いたものであるため、明確な目的や全体に共通する統一テーマ、また結論のようなものはない。しかし結果的には東アジアの古代から近世まで、また中国、朝鮮、日本（ベトナムについては第一部第一章、第三章で若干触れたにとどまる）にわたる時空をほぼカバーすることができた。

序論

本論文集の趣旨、および各篇の要旨

第一部 東亞各國之間の典籍文化交流

第一章 東亞争奇文学初探

本論文は、筆者が 1999 年、龍谷大学図書館の漢籍目録（集部）を作成した際、鄧志謨『童婉争奇』の明刊本を発見したことを契機に書いたものである。鄧志謨は『花鳥争奇』『山水争奇』など、同一部類中の相対する二つの物が論争し、第三者の調停により引き分けになるという類型の遊戯文学作品を七種も書いた。この類型の作品で最も早く、かつ有名なのは敦煌の「茶酒論」であるが、中国文学史では鄧志謨の作品はほとんど注目されていない。本論

文はこの類型の文学を争奇文学（日本語では遊戯的異類論争文学）と命名し、中国だけでなく近隣のチベット、布依族、朝鮮、ベトナム、日本にわたる関連作品を広く集め、比較検討を加えたものである。それによって主に以下の点を明らかにしている。

- (1) 中国の作品はすべて引き分けに終わるが、朝鮮の「梅柳争春」では梅が勝者となり、日本とベトナムには引き分けになるものと勝敗が決まるものの双方があり、単純に中国作品の模倣を見なすことはできない。
- (2) この類型の定義を、二者の優劣論争の後、最強者が現れ、二者が屈服するというものにまで拡大すると、司馬相如「子虚賦」「上苑賦」、左思「三都賦」等、文学史上重要な作品が含まれることになり、劉伶「酒徳頌」、陶淵明「形影神」などもこの観点からの新たな解釈が可能となる。
- (3) この形式の由来は、おそらく宴会での座興としての遊戯的な論争にある。
- (4) 朝鮮、日本、ベトナム等の作品を参照することで、中国文学の中に争奇文学の系譜ともいべき隠れた流れがあることが明らかになる。また争奇文学のほとんどは擬人的手法を取るので、従来あまり注目されて来なかった中国文学における擬人化の系譜を解明するうえでも有用である。

この他、以前は作品名のみ知られ、実体が明らかでなかった天龍寺妙智院蔵「勸世文酒茶四問」を翻字し、写真入りで紹介している。

本論文は当初、「東アジアの異類論争文学」（『文学』、岩波書店 2005.11.12 月号、6 巻 6 号）に発表、ついで中国語訳「東亜争奇文学初探」（『域外漢籍研究集刊』(2)、中華書局、北京 2006）、韓国語訳「동아시아 (東アジア) 쟁기문학(争奇文学)고찰(考察)」(『寓言의 人文学的 位相과現代的活用』、도서출판 박이정、2006.6)、英訳 The Lineage of Ludic Literature about Comparative Debates in East Asia、(The Reception of Chinese Literature in Japanese Literature and Its Transformation、ACTA ASIATICA107、2014) も発表、今回新たに増訂したものである。

## 第二章 “兒郎偉”的語義及上梁文的演變—兼談其對東亞的傳播

本論文は、まず敦煌の「驅儼文」、「上梁文」及び「障車文」に現れる「兒郎偉」の意味についての従来の諸説に対し、新羅義相『華嚴經問答』における「毎」の用法を手掛かりに、「偉」の語源は「毎」であることを主張する。ついで宋代以降清代に至るまでの「上梁文」作品（敦煌のものとは形式が異なる）を、『四庫全書』等のデータベースを利用して検索し、それらを形式によって A（三段形式の上段、中段に「兒郎偉」を使用）、B（中段のみ「兒郎偉」を使用）、C（中段一か所のみ「兒郎偉」を使用）、D（「兒郎偉」を使わない）、E（三段形式以外）の 5 類に分類し、その時代的展開のおよその傾向を考察した。さらに朝鮮、日本における「上梁文」作品を挙げて、同じ漢字文化圏ながら受容の様相が異なることを明らかにした。最後に最も新しい例として、ソウルの臥龍廟の扁額に書かれた 1976 年作の「上梁文」を紹介した。

本論文初出は、「児郎偉の語源と変遷および東アジアへの伝播について」（『稲畑耕一郎教授退休記念論集－中国古籍文化研究』 東方書店 2018）で、後に中国語訳「児郎偉的語義及上梁文的演變－兼談其對東亞的傳播」（中華民國聲韻學學會編輯『2021 第四屆韓漢語言學國際學術會議會後論文集－千里音緣一線牽』、台灣學生書局 2022）を發表、今回新たに増訂した。

### 第三章 略論〈二十四孝〉演變及其對東亞之傳播

本論文は、「二十四孝」成立と変化について、敦煌発見の「二十四孝押座文」から明末までの歴史を、高麗本「孝行録」系統（宋金元代華北で流行）、元末明初の郭居敬「二十四孝詩選」系統、明代後期「日記故事」系統の三つの系統によって考察し、それぞれメンバーに出入りがあることとその理由を説明し、さらに朝鮮、日本、ベトナムへの伝播にも言及したものである。特に最近新たに出土した金代の「画相二十四孝銘」のメンバーが高麗本「孝行録」と完全に一致し、かつ文言にも共通部分があることを指摘することで、元代以前の「二十四孝」の様相を明らかにした点に意義がある。これによって「二十四孝」のおよその歴史は解明されたと言える。北京語言大学《中国文化研究》2019-2 に掲載されたものを、今回新たに増訂した。

### 第四章 從《全唐詩》一首《臨刑詩》談日本、朝鮮資料在漢學研究上之價值

本論文は、『懷風藻』の天津皇子「臨終一絶」（金鳥臨西舍，鼓聲催短命。泉路無賓主，此夕離（一作誰）家向）とほぼ同内容の詩が、中国五代の江為（衙鼓侵人急，西傾日欲斜。黄泉無旅店，今夜宿誰家。以下ほぼ同じ）、明代の孫蕢、清代の金聖嘆、戴名世、民国の葉德輝、朝鮮の成三問が刑死した時の作としてそれぞれ伝わるという興味深い事実を考察したものである。以下の点を明らかにした。

- (1) 奈良時代の『浄名玄論略述』に見える陳後主の詩が、この問題を解く鍵である。『浄名玄論略述』は日本人の著述だが、内容は中国のものであることを種々の資料を用いて論証した。
- (2) 問題の詩の後半二句は、元雜劇、「水滸伝」などに頻出し、すでに成語と化していた。
- (3) 中国での作はすべて南京と関係があり、かつ文人筆禍による刑死での作である、一方、朝鮮と日本の作は謀反を企て、あるいは企てたと讒訴されての刑死である点、中国と異なる。
- (4) この詩は現実の旅行に対する古代人の恐怖が、死後の冥界への旅への恐怖に反映したもので、起源は古く、真の作者はわからない。詩は文学作品として特定の作者に属すると考えられがちだが、口承文芸として無名性によって伝播することもある。

本論文は、「黄泉の宿(臨刑詩の系譜)」（『興膳宏教授退任記念中国文学論集』 2000）、中国語訳「《全唐詩》一首《臨刑詩》談日韓資料在漢学研究上之價值」（『中華文史論叢』、第64輯、上海古籍出版社 2000）を今回新たに増訂したものである。

## 第二部 中國・日本之間的典籍文化交流

### 第一章 古代日人改用中國典籍舉隅

古代の日本人が中国の典籍を書写し、またそれを利用して書いた漢文には、日本語と中国語の語法の相違など、さまざまな理由によって誤解が生じ、場合によっては異なる意味になっている場合がある。本論文ではその中から四つの興味ある例を紹介した。

- (1) 正倉院蔵、唐・杜正倫撰『杜家立成雜書要略』の多賀城市川橋奈良時代遺跡発見の木簡では、原文の「雪寒喚知故飲書」の「喚」を「呼」に変え、「飲」を「酒飲」としてある。これは書写者が原文を訓読で読み、また日本語の語順で「酒」を加えたものである。
- (2) 熊本県浄水寺「南大門碑」(790)の「夫不人獨登，登者法。法不獨弘，弘者人」は、『論語』「衛靈公」篇の「人能弘道，非道弘人」をもとに書かれたと思えるが、最初の「不」の位置がおかしく、また「登」を他動詞に使うのも誤りである。作者の奘善は唐太宗「三藏聖教序」をも利用しており、相当の知識人であるが、漢文の語法には誤解があったようである。
- (3) 『今昔物語集』巻6「不空三藏誦仁王呪現驗語第九」では、原拠の不空三藏訳『毘沙門儀軌』の「十道」を「辻」、『大宋僧史略』巻3「城闍天王」の「別院」を「院毎」(いんごと)と訳している。前者は唐が全国を十道に分けた事実を知らなかったため、後者は「別」を後置した「～別」で「ごとに」となる特殊な語法(唐代に多く、正倉院文書、『日本書紀』にも見られる)によって曲解したものである。なおこの話に関連して毘沙門天(天王)と都市建設との関係について、平安京羅城門に置かれたとされる兜跋毘沙門像(東寺に現存)および元明代の大都、北京が那吒太子(毘沙門天の第三子)になぞらえて建設されたとする伝説にも言及する。
- (4) 『日本書紀』巻7「景行天皇」18年5月に見える火の国の語源となる不知火伝説(川を船で渡る時、嵐に遇ったが、不知火の靈験によって無事渡る)を、齊・陸杲『繫觀世音應驗記』(京都青蓮院蔵)の伏萬壽の条(同じく觀音の靈験で無事に長江を渡る)と比較し、不知火伝説は伏萬壽の話を換骨奪胎したものであることを論じる。ただし原文の「歐陽火」を「非人火」とした点は、「歐陽」が長江渡し場の地名であることを知らなかったため、この点は『太平広記』巻111〈報應十〉所引『法苑珠林』が、「歐陽火」を「陽火」(人火)とするのと、意味は逆だが、歐陽が地名であることを知らなかった点が共通する。なお中国で出た孫昌武點校《觀世音應驗記三種》(北京，中華書局，1994)、董志翹《觀世音應驗記三種譯注》(江蘇古籍出版社，2002)ともに「歐陽火」の意味を理解せず、削除した不備をも指摘する。

本論文の(1)は「杜家立成雜書要略と唐代文学」(『中国文史論叢』第5号，岡山大中国文史研究会，2009)および『漢文と東アジア—訓読の文化圏』(岩波新書1262，2010)、

(2) は『漢文と東アジア－訓読の文化圏』、(3) は「毘沙門信仰による都市伝説と預言書」(小峯和明編『東アジアの今昔物語－翻訳・変成・予言』勉誠出版 2012)、(4) は「古代日中比較文学についての断想－読むことと書くこと」(『古代文学』52、古代文学会 2013) にそれぞれ発表したもので、それらをまとめて翻訳し、中国の学会で発表した(何の学会であったか失念)。

## 第二章 日本書陵部蔵南宋刊《嚴氏濟生方》考－辨《全宋文》〈江萬〉之誤

本論文は、書陵部蔵南宋刊、嚴用和撰『嚴氏濟生方』の序文(後半を脱す)の作者を、『醫籍考』、『宋以前醫籍考』、『和刻漢籍醫書集成』第4輯所収『嚴氏濟生方・續方』および《全宋文》卷8090(第350冊)〈江萬〉などが、すべて同書の室町写本(内閣文庫蔵)によって江萬とするのは誤りで、作者は南宋末の宰相であった江萬里であることを、同序文の内容が『宋史』卷418の江萬里の伝と一致すること、また江萬里が刊行した『李翰林集』の写刻序の字体が『嚴氏濟生方』の写刻序と一致することによって論証したものである。あわせて嚴用和の師の劉開、そのまた師である崔嘉彦は朱子と交流があったことを紹介し、南宋時代における士人と医者との対等な交流について述べる。

本論文は、「『全宋文』訂正一則－江萬と江萬里」(『汲古』70号 2016)、「宮内庁書陵部蔵南宋刊『嚴氏濟生方』から見た士人と医士の交流」(『図書寮漢籍叢考』汲古書院 2018)を翻訳、増訂したものである。

## 第三章 日本龍谷大學所藏元郭居敬《百香詩選》等四種百詠詩考

本論文もまた1999年、龍谷大学図書館の漢籍目録(集部)を作成した際に、従来知られていなかった室町時代写本を発見したことを契機に書かれたものである。同写本には以下四種の宋元時代の百詠詩を収める。

- (1) 元郭居敬『新編郭居敬百香詩選』(他に伝本は知られず天下の孤本)
- (2) 宋張逢辰『愛梅吟詠菊花百詠』(元祿7年和刻本あり、蓬左文庫蔵『和中峰和尚梅花百詠詩』の付録、明初抄本『詩淵』のものも収めるが、本書がもっとも完全)
- (3) 元章珪『梅花百詠』(文政7年和刻本あり、阮元『宛委別藏』、萬歴36年王化醇尊生齋所刊『百花鼓吹』所収)
- (4) 無名氏『新刊精選吟詠百花詩集』(寛永14年刊、月舟壽桂編『續錦繡段』にも付載、中国には伝本なし)

論文では、以上四種について、内容を紹介すると共に、作者、序跋の作者について考証し、あわせて日中における百詠詩の伝統について論じた。特に『新編郭居敬百香詩選』については、作者の郭居敬のもう一つの著作『二十四孝詩選』との関係について論じた。また最後に『新刊精選吟詠百花詩集』の全文を校訂のうえ翻字したものを附載した。

本論文は当初、「日本龍谷大學所藏元朝郭居敬撰《百香詩選》等四種百詠詩簡考」(張寶三・楊儒賓編『日本漢學研究初探』喜馬拉雅研究發展基金會 2002)、「龍谷大学所藏元郭

居敬撰『百香詩選』等四種百詠詩について」(『日本漢學研究初探』勉誠出版社 2002)として発表、その後、中国で(1)については、楊鑄〈日本抄本郭居敬《百香詩選》〉(《中國典籍與文化》60期, 2007)、(2)については下東波〈日本所藏宋人張逢辰《菊花百詠》校録〉(《域外漢籍研究集刊》第八輯, 2012)が出た。これを受けて筆者は、2014年に北京大学での五山文学国際研討会で補説を発表し、のち「龍谷大學藏元郭居敬《百香詩選》續考」(劉玉才、潘建國主編《日本古鈔本與五山版漢籍研究論叢》, 北京大學出版社, 2015)を発表した。今回両者をひとつに合わせ増訂したものである。

### 第三部 中國・朝鮮之間的典籍文化交流

#### 第一章 韓國發現元刊本《至正條格》殘卷簡介

本論文は、2002年に韓国で発見された、元代最後の法令集であり、つとに佚書となっていた『至正條格』殘卷の書誌事項、内容を紹介し、その編集過程を考証するとともに、朝鮮における伝存とその利用状況について述べたものである。元朝の法令は条格(行政関係)と断例(刑法関係)から成るが、従来は『通制条格』(『大元通制』の条格部分)のみで、断例の具体的内容について不明であったのが、本書には断例が含まれている点が貴重である。またその編纂過程には、元末のモンゴル宮廷と漢人官僚との複雑な政治背景が反映しているが、これについての推測を述べる。さらに朝鮮に本書が伝存したのは、明代になっても朝鮮は明朝に面従腹背の態度を取ったことが一つの要因であることを述べた。

筆者は同書発見当初より、韓国学中央研究院の要請により、同書の点校、注釈作業を行い、その成果は韓国学中央研究院編『至正條格校註本』、『影印本』(ソウル, 휴머니스트出版그룹, 2007)として公刊された。本論文は、同書に掲載されたものを、今回増訂したものである。

#### 第二章 朝鮮翻刻明伊王府本《釋迦佛十地修行記》考—兼論高麗漢語課本《朴通事》中《西遊記》故事

本論文は韓国に現存する順治17年(1660 朝鮮顯宗1年)刊『釋迦佛十地修行記』について、朝鮮での著作、または明刊本とされて来た従来の誤解に対し、序文、跋文の内容から、明代洛陽にあった王府である伊王府による正統13年(1448)刊本の翻刻本であることを述べ、ついで同書の第七地〈金牛太子傳〉が、敦煌本『佛說孝順子修行成佛經』に依拠しつつも、太子が高麗の王女と結婚する話から、元末における元朝廷と高麗との緊密な関係を反映していることを論じ、さらに高麗時代に書かれた中国語教科書『朴通事』に見える小説『西遊記』の引用と同書が関係することを推論したものである。あわせてこの時期、印度から中国に来て、さらに高麗に渡った僧侶、指空が『西遊記』成立に関与した可能性を、現在韓国に残る『西遊記』関係の遺物から推測する。

本論文は、2018年、中国人民大学で開かれた説話学会で口頭発表、その後、「朝鮮翻刻明伊王府刊『釋迦佛十地修行記』の金牛太子説話について」(説話文学会編『説話文学研

究の最前線』文学通信 2020) を発表、また 2020 年に復旦大学での講義にも用いた(『復旦大学学報』掲載予定だが、コロナのため延期)。今回新たに増訂したものである。

### 第三章 十八、十九世紀朝鮮燕行使在清朝的交流活動—介紹藤塚鄰博士遺品

本論文は、もと京城帝大教授で『清朝文化東傳の研究』の著者である藤塚隣博士の遺品を、2014年に筆者が偶然、骨董商から入手したことを契機に、2015年、京都大学人文科学研究所において展示会と関連シンポジウムを開催し、展示パンフレットを作成したことによって執筆したものである。遺品のほとんどは朝鮮の燕行使節として清朝の北京に赴いた朝鮮の文人が中国の文人と交流し、中国の文人が贈った書画、扇面である。論文ではそれら遺品の内容とその背景を図版とともに紹介した。現在これら朝鮮と中国の文人の交流は、文化、教養を共有する文人同士の友好的関係として顕彰されることが多いが、もとよりそのような側面があることは事実だが、一方、双方の間での国家観の違いによる衝突や矛盾もあったことを、本論文では指摘している。たとえば朝鮮の柳得恭に中国の曹江が贈った扇面には、送別詩と「皇王施令，寅嚴宗誥。我有絲言，兆民尹好」(『文心雕龍』「詔策篇」の贊)の二点があるが、後者は朝貢関係を前提とした文句である。柳得恭は曹江との交流について、『燕臺再遊録』の中で詳しく述べているが、この扇面については一言も触れていない。柳得恭はまた紀昀に自著の『渤海考』の義例を送り、『四庫全書』に収録するよう要望したが、これは渤海を朝鮮の領土と主張するもので、もとより紀昀が受け入れられものではない。この問題は現在、中国と韓国との間の高句麗論争につながるものである。このほか義州にある〈金徳雲墓碑〉、〈誥命碑〉の拓本は、清朝の捕虜となった朝鮮人の子孫、常明が、のちに康熙帝の信任を得て出世し、曾祖父、金徳雲の墓碑を故郷に立てよう清の朝廷より働きかけたものである。朝鮮としては自国の人民が中国で官位を得て、自国に命令を下すことは、きわめて憂慮すべき事態であったが、やむなく従っている。常明の従孫の金簡は、『四庫全書』の副総裁、武英殿聚珍版の責任者を務めた重臣だが、朝鮮使節のため種々の便宜を図ったとされる。なお常明の母、朴氏は、順治、康熙兩帝の保母で奉聖夫人に封ぜられた。最後に藤塚博士が義州で収集した資料「皇后ノ産兒取換」は、清朝の皇帝が実は朝鮮人だという伝説で、中国の乾隆帝中国人説と同工異曲の話である。これらは従来、まったく知られていない資料で、藤塚博士の遺品によって初めて明らかになったものである。

本論文の内容は、『藤塚隣博士遺品展示会目録・解題』(京大人文研 2015)、「十八・十九世紀朝鮮燕行使の清朝における交流—藤塚隣博士遺品の紹介を通じて」(『日本中国学会報』67集 2015)、「十八、十九世紀朝鮮燕行使在清朝的交流活動—介紹藤塚隣博士遺品」(『中正漢学研究』28期 2016年)に発表、今回増訂したものである。

## 第四部 朝鮮・日本之間的文化交流

### 第一章 《萍遇録》——十八世紀末朝鮮通信使與日本文人的筆談記録

本論文は、平成 19-22 年度科研基盤 B「建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究」に参加した筆者が、両足院蔵書の悉皆調査の過程で撮影した相国寺の僧、大典と宝暦度朝鮮通信使との筆談記録『萍遇録』写本をもとに、2000～2013 年の間、韓国成均館大学東アジア学院の碩座教授に赴任した際、『萍遇録』の講読を行い、その成果を解説訳注『18 세기 일본지식인 조선을 엿보다 (18 世紀日本の知識人朝鮮をのぞく) (成均館大學校出版部 2013)』として公刊したことを契機に執筆したものである。

まず『萍遇録』の現存伝本について概説し、大典およびその友人の木村蒹葭堂が朝鮮側書記と交わした朝鮮の科挙、日本の訓読などに関する筆談内容を紹介した。特に朝鮮側の要請により木村蒹葭堂が描き、大典たちが詩を添えた「蒹葭堂雅集図」(韓国国立博物館所蔵を筆者が発見し紹介)と、この時起こった対馬の通事、鈴木伝蔵による朝鮮の訓導、崔天宗殺害事件をめぐる、事件の真相に疑問をもった朝鮮側の要求により大典が書いた「書鈴木傳藏事」をめぐる両者の駆け引きに焦点を当て紹介している。前者が文人友好の雅事とすれば、後者は現実の外交事件をめぐる衝突である。大典は朝鮮側の心情に共感しながらも、真相を明かすことはできず、小説的な興味本位の文章を書いている。最後に「書鈴木傳藏事」全文を附載した。この文は、大典が自分の文集に収めなかったため、日本では『萍遇録』によってのみ見ることができる。

本論文は、「『萍遇録』と「蒹葭堂雅集圖」-十八世紀末日朝交流の一側面」(『東方學』124 輯 2012)、中国語訳「《萍遇録》-18 世紀末朝鮮通信使与日本文人的筆談記録」(『東亜漢詩文交流唱酬研究』 中西書局 2015) として発表、今回後者を増訂したものである。

## 後記

各論文の執筆、初出状況。